（研究ノート）

奄美諸島と八重山諸島における高齢者の生活と福祉ニーズ

ー調査対象者の健康状態、家族の状況、社会とのかかわり状況ー（1）

岩崎房子・小窪輝吉・田畑洋一・田中安平・
髙山忠雄・玉木千賀子

研究ノート

奄美諸島と八重山諸島における高齢者の生活と福祉ニーズ[1)]

ー調査対象者の健康状態、家族の状況、社会とのかかわり状況ー（1）

岩崎房子・小窪輝吉・田畑洋一・田中安平・
髙山忠雄・玉木千賀子[2)]

和文抄録：本研究の目的は、琉球弧の北に位置する鹿児島県の奄美諸島と南に位置する沖縄県の八重山諸島における島嶼地域の高齢者の生活の現状と福祉ニーズを把握することである。調査対象地は、奄美諸島の中心である奄美市（島嶼都市部）および瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島（島嶼集落部）、八重山諸島の中心である石垣市（島嶼都市部）、および竹富町西表島西部および鳩間島（島嶼集落部）であった。鹿児島県の場合、特に島嶼集落は過疎高齢化が進行し、集落機能の低下を余儀なくされている。沖縄県の場合、鹿児島県ほどの過疎高齢化は進んでいない状況であるが、島嶼地域のもつ生活上の課題を共有している。いずれも、相互扶助の伝統等の地域文化あるいはその精神が残っているという共通点を持つ地域である。

本稿では、調査対象者の属性、健康状態、家族の状況、社会参加状況および社会関連性指標についての分析結果を示す。居住地域と年齢の両方に回答した対象者は714人（男性284人、女性430人）であった。健康状態では、すべての調査対象地で健康な人の割合が高かった。家族の状況では、対象地ごとに特徴がみられた。集落行事への参加は島嶼集落部の方が高かったが、社会とのかかわり状況全般では島嶼集落部の方が低かった。

Key Words：島嶼地域、高齢者の生活、社会関連性指標

研究の背景と目的

社会福祉法第四条では、「地域住民、社会福祉を目的とする事業を経営する者及び社会福祉に関する活動を行う者は、相互に協力し、福祉サービスを必要とする地域住民が地域社会を構成する一員として日常生活を営み、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられるように、地域福祉の推進に努めなければならない。」と地域福祉の推進について明示されており、各地方公共団体では、市町村地域福祉計画（社会福祉法第百七条）、そして都道府県地域福祉計画（社会福祉法第百八条）の一環として健康の維持・増進に向けた具体的な取り組みがおこなわれている。しかし、このような取り組みは、主に地域における社会資源の活用の促進による政策目標の達成が意図されており、保健医療福祉サービス等の社会資源が十分に整備されていない島嶼地域においては、政策目標の達成に資するべき社会資源の整備に関する地域間格差の是正が最重要課題となっている。一方、島嶼地域では、その地理的環境によって、財政力・経済力に恵まれず、健康状態の悪化が島内での生活継続を困難な状態に陥れる大きな要因の一つとなっており、社会資源によらない健康の維持・増進方法を模索することが喫緊の課題と考えられる（山下・村山他、2007：240）。

ところで、鹿児島県奄美諸島の島嶼集落に関する研究は、九学連合奄美調査委員会(1982)による民俗学的・社会学的研究が代表的なものであり、生業の変化と過疎化による地域共同体の崩壊、それにともなう住民の連帯感や協力意識の低下の懸念が指摘された。その後、明治学院大学による研究グループ(原田ら、1999)が加計呂麻島の集落調査を行い、相互扶助の伝統が根強く残っている地域特性を挙げ、過疎高齢化の進行する中で高齢者が連帯して積極的に参加して地域社会の活力維持に努めている「長寿村」のモデルとして紹介した。

本研究代表者である田畑(1996)は、奄美大島南部の高齢者の生活を調査し、低収入と公的年金あるいは生活保護に頼らざるを得ない高齢者の生活の中で、交際費の占める割合が高いことを指摘し、この支出が相互扶助という共助のサービスを受けるための一種の対価あるいは貯金の役割を果たしていると考察した(田畑、1996：242)。その後に行われた奄美南部の加計呂麻島と古仁屋の高齢者調査(小窪・田畑、2001)において、①島嶼集落の高齢者が離島という地理的・経済的に不利な状況におかれながら、良好な地域・近隣関係に支えられて心豊かな生活を送っていること、しかし②離島では島嶼集落の基盤が低下しているため、いわゆる「元気高齢者」しか生活しにくいこと、③共同体の再生を促す努力がいま一層求められていること、が指摘された。その後、科学研究費研究助成「平成15年～平成17年度　基盤研究(B)『離島の離島における高齢者の自立生活と地域の役割に関する研究』」(研究代表者：田畑洋一、平成16年度より代表者を小窪輝吉に変更、課題番号　15330130)を受け、奄美大島南部の加計呂麻島、請島、与路島の保健福祉サービス提供と利用の現状とそこで暮らす高齢者の生活実態を文献資料や聞き取り調査およびアンケート調査から明らかにした。結果、①福祉制度はあるが福祉サービスが受けられない離島の現状、②離島ゆえに日常生活基盤が整っていない中での高齢者の生活の問題、③相互扶助的な文化の残る地域特性、④過疎高齢化による地域基盤の弱体化など、離島ならではの生活問題が明らかになった。離島高齢者が住み慣れた土地で豊かな老後を送るのに必要なものとして、また持続可能な集落を維持していく生活基盤として役に立つ福祉サービス拠点の整備の必要性を指摘した。研究終了後も、加計呂麻地域包括支援センターと意見交換を継続して研究対象地域の現状把握を行っている。結果、島嶼地域においては、保健・福祉の充実ばかりではなく、地域や集落の維持と活性化が急務であるという認識に至った。

また、髙山(例えば2003)は、これまで永い間、地域で生活する障害者を支援するための生活環境設計のあり方の研究にかかわってきた。最近では、科学研究費研究助成「平成16～18年度　基盤研究(B)『健やかで安らぎのある生活環境の形成－美的倫理的ヒューマン・エコシステムの要件』」(研究代表者：髙山忠雄、課題番号　16300232)を受け、医療・保健・福祉を基盤に置く生活環境を新しい文化として形成するに方法について多角的に学際的研究を行った。また、厚生労働科学研究費補助金＜長寿科学総合研究事業＞「平成18～20年度『効果的な介護予防型訪問・通所リハビリテーションの実態把握からみた自立生活支援プログラムの開発評価に関する研究』」を受け、地域特性を考慮した介護予防のあり方に関する評価研究を行った。結果、地域リハビリテーションを推進するには新しい生活文化学的ヒューマン・エコシステム(人間的生態系)の構築

が必要で、そのためには医療・保健・福祉を基盤におくこと、衣食住の生活環境や生活デザインの整備、伝統的・歴史的文化への考慮が重要であることを指摘した。

集落の活性化の課題とその解決に向けた検討を行い、①伝統文化が根強く残る島嶼集落の地域文化を福祉資源の観点から掘り起こし、②それを活かした地域再生・活性化を高山の提唱する地域リハビリテーションの方法をもとに構想し実践する、という着想に至った。

しかしながら、これまでは奄美群島に限定していたが、本研究では、典型事例となる島嶼集落の研究知見の一般化を図るために、琉球弧の北に位置する奄美諸島と南に位置する沖縄県の八重山諸島における島嶼地域の高齢者の生活の現状とニーズを把握することにした。本稿では、調査対象地(奄美市、瀬戸内町、石垣市、竹富町)間の比較を中心に報告する。

研究方法

1．調査対象

琉球弧を形成する島嶼集落における高齢者の生活の現状と福祉ニーズを把握するため、鹿児島県の奄美諸島の中心である奄美市および島嶼集落部である瀬戸内町、沖縄県の八重山諸島の中心地である石垣市、その島嶼集落部である竹富町、の４つの地域(集落)を調査対象とした。奄美市と石垣市では、持ち家の多い住宅街を調査対象地として選定し、瀬戸内町では加計呂麻島から２集落選び、請島の２集落、与路島の１集落を調査対象地とした。竹富町では西表島西部から５集落、鳩間島の１集落を調査対象地とした。

2．調査方法

留置き法で、民生委員から配布と回収の協力を得た。調査対象者は４つの地域に居住する高齢者で、４地域から約200人ずつ約800人を対象とした。奄美市と石垣市の場合、調査対象となる地区を選定し、調査実施に協力していただいた地区担当の民生委員に均等になるように割当人数を決め、民生委員の自宅から近い順に必要人数を対象者として選んでもらった。奄美市では、４人、石垣市では５人の民生委員に調査実施に協力して頂いた。島嶼集落部の場合、集落担当の民生委員に調査実施に協力して頂いたので、瀬戸内町および竹富町ではそれぞれ６人の民生委員の協力を得た。なお、竹富町西表島西部の１集落の対象者が多かったため、町全域担当の民生委員にも協力を得た。調査実施においては、「調査協力を断られた場合や、調査不能の場合は調査しない。いわゆる補充調査はしない。調査に協力する意向があるが、自分で回答できない場合は、聞き取り形式で調査する。」という条件のもとで行ってもらった。調査は767人を対象とし、732人からの回答を得た(回収率95.4%)。調査時期は、2012年10月中旬～11月中旬であった。調査結果の集計は、IBM SPSS Statistics 19を用いた。なお、以下の集計結果においては、質問項目への無回答が含まれるので、回答者数は質問項目ごとに異なる。

3．倫理上の配慮

調査票に調査の趣旨とともに、回答は自由意志であり、拒否しても不利益を被ることがないこと、調査は無記名で、個人が特定できないよう統計処理をすることを説明した文書を添付した。また、本研究の研究対象者に対する倫理的配慮について、鹿児島国際大学大学院教育倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した。

結果

1．調査対象者の属性

1）居住地域と年齢構成

対象者の居住地域および年齢構成を表１に示す。居住地域については、島嶼地域の島嶼都市部と島嶼集落部、および県別においてもほぼ均等の回答者数が得られた。年齢構成については、全体の平均年齢は77.8歳（SD=7.695）であった。奄美市の平均年齢は76.8歳（SD=7.61）、瀬戸内町が79.5歳（SD=7.397）、石垣市は78.2歳（SD=7.769）、竹富町は76.5歳（SD=7.633）であった。４対象地域を比較すると、島嶼集落部ではあるものの、竹富町では前期高齢者の割合が最も高く、後期高齢者の割合が最も低かった。一方、同じ島嶼集落部でも瀬戸内町は、前期高齢者の割合が最も低く、後期高齢者の割合が最も高いという傾向がみられた。

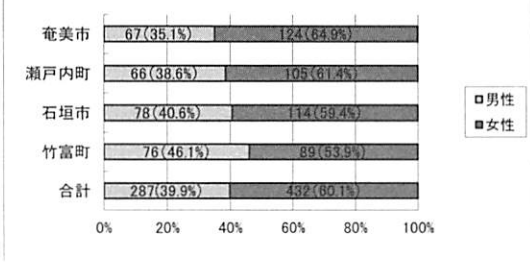
表１　分析対象者の年齢

		前期高齢者	後期高齢者	合計
奄美市	男性	30	36	66 (34.9%)
	女性	48	75	123 (65.1%)
	合計	**78 (41.3%)**	**111 (58.7%)**	**189**
瀬戸内町	男性	22	43	65 (38.2%)
	女性	21	84	105 (61.8%)
	合計	**43 (25.3%)**	**127 (74.7%)**	**170**
石垣市	男性	27	50	77 (40.3%)
	女性	37	77	114 (59.7%)
	合計	**64 (33.5%)**	**127 (66.5%)**	**191**
竹富町	男性	48	28	76 (46.3%)
	女性	24	64	88 (53.7%)
	合計	**72 (43.9%)**	**92 (56.1%)**	**164**
合計	男性	127	157	284 (39.8%)
	女性	130	300	430 (60.2%)
	合計	**257 (36.0%)**	**457 (64.0%)**	**714**

2）性別

対象者の性別構成は、図１のとおりである。全体では、男性287人（39.9%）、女性432人（60.1%）であり、４対象地域ともに男女比はほぼ同様であった。

図1　対象者の性別と居住地域



2．健康状態

1）主観的健康状態

主観的な健康状態について「あなたのお体の具合はいかがですか。」と質問した結果を表２に示す。

全体では、「健康である」が31.6%、「あまり健康であるとはいえないが、病気ではない」が56.4%、「病気がちで、寝込むことがある」が10.1%、「病気で、一日中寝込んでいる」が2.0%であった。カイ二乗検定をする際、期待度数が５未満のセルを解消するために「病気がちで、寝込むことがある」と「病気で、一日中寝込んでいる」を合計した。その結果、対象地と健康状態の間に有意な関連性はみられなかった（χ^2=5.940, df=6, p>.10）。これは健康状態に地域差がないことを示している。

内閣府が公表した「平成24年度版　高齢社会白書」によると、60歳以上の男女に対する健康についての意識調査（平成22年度）では、「健康である」65.4%、「あまり健康であるとはいえないが、病気ではない」28.7%、「病気がちで、寝込むことがある」5.1%、「病気で、一日中寝込んでいる」0.4%となっている。本調査では、「健康である」と答えた人より「あまり健康であるとはいえないが、病気ではない」と答えた人の割合が高かった。この結果は、調査対象者の64%を後期高齢者が占めているためであろうと考える。前掲「奄美南部の加計呂麻島と古仁屋の高齢者調査（小窪・田畑、2001）」において、離島には「元気高齢者」しか住めないと指摘しているが、歳月の経過にともない現在では「やや元気高齢者」が多く住む地域へと変容していると指摘することもできる。

表２　健康状態

	健康	やや健康	病気がち	病気	合計
奄美市	33.2%（63）	53.7%（102）	10.0%（19）	3.2%（6）	190
瀬戸内町	26.8%（44）	62.8%（103）	9.8%（16）	0.6%（1）	164
石垣市	30.3%（57）	58.5%（110）	8.5%（16）	2.7%（5）	188
竹富町	36.0%（59）	50.6%（83）	12.2%（20）	1.2%（2）	164
合計	31.6%（223）	56.4%（398）	10.1%（71）	2.0%（14）	706

次に、「病気がちで、寝込むことがある」「病気で、一日中寝込んでいる」と答えた83人の高齢者に、「その症状を教えてください。（○はいくつでも）」と質問した。その結果を表３に示す。

全体では、「腰痛」「ひざの痛み」がそれぞれ40人と最も多く、「体がだるい」「便秘」がそれぞれ34人、「手足がしびれる」32人の順であった。圧倒的にADLに影響を及ぼす骨関節症状および高齢者特有の加齢による症状が上位を占めた。なお、「手足のしびれ」に関しては、少々気になる症状ではあるが、後述の質問項目「病気の種類」のなかで上位にあがった高血圧・脳卒中との関連がみられるかはこの調査では特定できない。

表３　病気の症状(複数回答)

	奄美市	瀬戸内町	石垣市	竹富町	回答者数
体がだるい	②54.2%(13)	②47.1%(8)	35.0%(7)	28.6%(6)	34
頭痛	16.7%(4)	23.5%(4)	20.0%(4)	14.3%(3)	15
腰痛	③45.8%(11)	②47.1%(8)	①50.0%(10)	②52.4%(11)	40
ひざの痛み	①62.5%(15)	①52.9%(9)	②40.0%(8)	38.1%(8)	40
肩こり	29.2%(7)	35.3%(6)	30.0%(6)	42.9%(9)	28
手足がしびれる	③45.8%(11)	23.5%(4)	30.0%(6)	②52.4%(11)	32
食欲がない	8.3%(2)	5.9%(1)	35.0%(7)	4.8%(1)	11
息切れ	12.5%(3)	29.4%(5)	5.0%(1)	23.8%(5)	14
めまい・立ちくらみ	8.3%(2)	17.6%(3)	10.0%(2)	28.6%(6)	13
吐き気	0%(0)	5.9%(1)	10.0%(2)	0%(0)	3
目の疲れ	12.5%(3)	29.4%(5)	35.0%(7)	9.5%(2)	17
胸の痛み・圧迫感	12.5%(3)	5.9%(1)	15.0%(3)	14.3%(3)	10
便秘	25.0%(6)	④41.2%(7)	②40.0%(8)	①61.9%(13)	34
下痢	0%(0)	11.8%(2)	10.0%(2)	4.8%(1)	5
尿が出にくい・もれる	12.5%(3)	5.9%(1)	30.0%(6)	33.3%(7)	17
その他	8.3%(2)	0%(0)	5.0%(1)	14.3%(3)	6
回答者数	24	17	20	21	82

２）客観的健康状態

客観的健康状態について「病気がちで、寝込むことがある」「病気で、一日中寝込んでいる」と答えた83人の高齢者に「その病気は何ですか。(○はいくつでも)」と質問した結果を表４に示す。

全体では、「高血圧」と答えた人が40人と最も多く、次いで「骨・関節の病気」37人、「目の病気」21人であった。対象地の特徴としては、瀬戸内町では、脳卒中と糖尿病の罹患者がほとんどみられなかった。医療機関の不足、または無い環境が、その症状や後遺症などにより日常生活自立度の低下をきたし、住み慣れた地域での生活を困難にしているのではないかということや、離島特有の食物調達上の諸問題などが絡み合っているのではないかということが推測された。

表４　病気の種類(複数回答)

	奄美市	瀬戸内町	石垣市	竹富町	回答者数
高血圧	②36.0%(9)	①60.0%(9)	①42.9%(9)	①59.1%(13)	40
心臓病	8.0%(2)	④26.7%(4)	19.0%(4)	③22.7%(5)	15
脳卒中	③28.0%(7)	0.0%(0)	14.3%(3)	13.6%(3)	13
糖尿病	④20.0%(5)	6.7%(1)	23.8%(5)	③22.7%(5)	16
胃・十二指腸潰瘍	8.0%(2)	13.3%(2)	0.0%(0)	0.0%(0)	4
肝臓の病気	4.0%(1)	6.7%(1)	4.8%(1)	0.0%(0)	3
肺の病気	8.0%(2)	6.7%(1)	14.3%(3)	0.0%(0)	6
がん	0.0%(0)	0.0%(0)	4.8%(1)	9.1%(2)	3
目の病気	16.0%(4)	③33.3%(5)	③33.3%(7)	22.7%(5)	21
骨・関節の病気	①48.0%(12)	②40.0%(6)	①42.9%(9)	②45.5%(10)	37
その他	16.0%(4)	13.3%(2)	③33.3%(7)	13.6%(3)	16
回答者数	25	15	21	46	174

３）日常生活での介助の必要度

日常生活での介助の必要性について「あなたは、日常生活を送る上で、誰かの介助が必要ですか。」と質問した結果を表５に示す。

全体では「まったく不自由なく過ごせる」が51.5%、「少し不自由だが何とか自分でできる」37.2%、「不自由で、一部他の人の世話や介護を受けている」8.5%、「不自由で、全面的に他の人の世話や介護を受けている」2.8%であり、88.7%の人が自立可能で、11.3%の人が介護を必要とする状態であった。

内閣府が公表した『平成24年度版　高齢社会白書』によると、60歳以上の男女に対しておこ

なった「高齢者の生活と意識に関する調査(平成22年度)」では、「まったく不自由なく過ごせる」89.8%、「少し不自由だが何とか自分でできる」7.4%、「不自由で、一部他の人の世話や介護を受けている」2.2%、「不自由で、全面的に他の人の世話や介護を受けている」0.7%であった。本調査結果では「まったく不自由なく過ごせる」が少なく、「少し不自由だが何とか自分でできる」が多かった。ここでも「元気高齢者」ではなく「やや元気高齢者」の存在を裏付ける結果がみられた。対象地の特徴では、特に瀬戸内町は、「少し不自由だが何とか自分でできる」52.7%から「不自由で、一部他の人の世話や介護を受けている」6.7%への落差が極端であることから、一部介助が必要になった時＝地域を離れる時であることを意味しているのではないかと思われた。瀬戸内町は他の地域に比べ、数年～十数年先の超高齢社会を先取りした状況であり、島嶼地域の将来像、ひいては日本の将来像を示唆しているように思われる。

表５　日常生活で誰かの援助を必要とするか

	奄美市	瀬戸内町	石垣市	竹富町	合計
まったく不自由なく過ごせる	56.6%(103)	38.8%(64)	55.0%(99)	55.1%(87)	51.5%(353)
少し不自由だが何とか自分でできる	29.1%(53)	52.7%(87)	33.3%(60)	34.8%(55)	37.2%(255)
不自由で、一部他の人の世話や介護を受けている	10.4%(19)	6.7%(11)	8.3%(15)	8.2%(13)	8.5%(58)
不自由で、全面的に他の人の世話や介護を受けている	3.8%(7)	1.8%(3)	3.3%(6)	1.9%(3)	2.8%(19)
合計	182	165	180	158	685

３．家族の状況

１）世帯状況

世帯状況について「あなたの世帯状況は次のうちどれにあたりますか。」と質問した。表６に示すように、全体では「夫婦のみ」の世帯が37.4%、「一人暮らし」の世帯が26.1%、「子どもと同居（二世代同居）」世帯が24.0%、「子どもと孫と同居（三世代同居）」世帯が7.1%であった。カイ二乗検定をする際、期待度数が５未満のセルを解消するために「その他の親族と同居」と「その他」を合計した。その結果、調査対象地と世帯状況の間に有意な関連性がみられた（χ^2 =61.586, df=12, p<.01）。これは世帯状況に地域差があることを示している。石垣市においては子どもとの同居世帯が多く一人暮らし世帯が少なかった。一方、瀬戸内町では子どもとの同居世帯が少なく一人暮らしと夫婦世帯が多かった。瀬戸内町では、「一人暮らし」「夫婦のみ」世帯を合計すると78.1%と最も高く、今後ますます一人暮らし世帯が増加することが予測される。

表6　世帯状況

	奄美市	瀬戸内町	石垣市	竹富町	合計
一人暮らし	25.8%(48)	33.1%(56)	14.4%(27)	32.5%(53)	26.1%(184)
夫婦のみ	41.9%(78)	45.0%(76)	32.6%(61)	30.1%(49)	37.4%(264)
子どもと同居(二世代同居)	22.6%(42)	14.2%(24)	33.7%(63)	24.5%(40)	24.0%(169)
子どもと孫と同居(三世代同居)	7.0%(13)	1.8%(3)	13.9%(26)	4.9%(8)	7.1%(50)
その他の親族と同居	0.5%(1)	1.2%(2)	2.7%(5)	2.5%(4)	1.7%(12)
その他	2.2%(4)	4.7%(8)	2.7%(5)	5.5%(9)	3.7%(26)
合計	186	169	187	163	705

２)子どもとの同居状況

子どもとの同居状況について「現在、お子さんと一緒に暮らしていますか。」と質問した。

結果は表７に示すとおり、全体では「子どもと一緒に暮らしていない」54.9%、「子どもと一緒に暮らしている」36.2%、「子どもはいない」9.0%であった。子どもと別居している割合が半数以上を占めた。カイ二乗検定の結果、調査対象地と子どもとの同居状況の間に有意な関連性が

みられた（χ^2=44.172, df=6, p<.01）。特に石垣市は、子どもと同居している割合が53.3%と最も高く、瀬戸内町が19.6%と最も低かった。また、子どもとの同居割合は、沖縄県と鹿児島県の差が大きいことがわかった。地域の伝統文化、生業との関連性についても着目していく必要があると思われる。

表7　子どもとの同居状況

	子どもと同居	子どもと別居	子どもはいない	合計
奄美市	33.7%（59）	57.7%（101）	8.6%（15）	175
瀬戸内町	19.6%（32）	68.1%（111）	12.3%（20）	163
石垣市	53.3%（96）	41.7%（75）	5.0%（9）	180
竹富町	36.4%（55）	53.0%（80）	10.6%（16）	151
合計	36.2%（242）	54.9%（367）	9.0%（60）	669

3）一番近くに住む子どもとの交流状況

子どもと一緒に暮らしていない419人に対して、「一番近くに住んでいるお子さんとは、どれくらいの頻度で会われますか。」と質問した結果を表８に示す。

全体では「ほとんど毎日」が28.9%、「月に数回」が20.8%、「週に数回」が19.1%、「年に数回」が17.9%、「ほとんど会わない」が13.4%であった。対象地別でみると、毎日子どもと交流している割合は、石垣市が47.9%と最も高く、瀬戸内町が14.4%と最も低かった。また、毎日子どもと交流している頻度は、沖縄県のほうが鹿児島県よりも多い傾向がみられるなど、対象地間で交流頻度に違いがみられた（χ^2=50.976, df=12, p<.01）。沖縄県は同居率が高く、また子どもと別居している場合においても、子どもは緊急時にも行き来可能な近隣に住んでいることがわかる。

表8　子どもと別居しているなかで、子どもと会う頻度

	ほとんど毎日	週に数回	月に数回	年に数回	ほとんど会わない	合計
奄美市	24.5%（27）	28.2%（31）	15.5%（17）	20.0%（22）	11.8%（13）	110
瀬戸内町	14.4%（17）	13.6%（16）	32.2%（38）	23.7%（28）	16.1%（19）	118
石垣市	47.9%（46）	19.8%（19）	11.5%（11）	12.5%（12）	8.3%（8）	96
竹富町	32.6%（31）	14.7%（14）	22.1%（21）	13.7%（13）	16.8%（16）	95
合計	28.9%（121）	19.1%（80）	20.8%（87）	17.9%（75）	13.4%（56）	419

4．社会参加状況

1）集落行事への参加

表９に示すように、集落行事への参加は「よく参加している」と「ある程度参加している」を合わせた「参加している」が63.1%であり、全体的には集落行事に参加している人が多かった。対象地別にみると、瀬戸内町と竹富町の方が奄美市と石垣市よりも参加状況が良く、集落部の参加度が高いことを示していた（χ^2=113.838, df=9, p<.01）。集落行事への参加は、島嶼集落部の方が島嶼都市部よりも高く、また同じ集落部であっても瀬戸内町の方が竹富町よりも高い傾向がみられた。

表９　集落行事への参加

	よく参加している	ある程度参加している	あまり参加していない	ほとんど参加していない	合計
奄美市	26.6%(50)	27.1%(51)	18.6%(35)	27.7%(52)	188
瀬戸内町	60.6%(100)	23.0%(38)	7.3%(12)	9.1%(15)	165
石垣市	13.0%(24)	31.9%(59)	21.1%(39)	34.1%(63)	185
竹富町	47.2%(75)	27.0%(43)	9.4%(15)	16.4%(26)	159
合計	35.7%(249)	27.4%(191)	14.5%(101)	22.4%(156)	697

２）近所付き合いの頻度

週に何回ぐらい近所の人たちと話すか答えてもらった結果を表10に示す。近所付き合いの頻度は、全体では「ほとんど毎日」と答えたのが約半数に達していた。対象地別にみると、近所付き合いの頻度は、瀬戸内町で高く、石垣市で低く、奄美市と竹富町は瀬戸内町と石垣市の中間に位置する頻度であった。（χ^2=89.027, df=12, p<.01)。近所付き合いの頻度に関しては島嶼都市部と島嶼集落部の違いとしてだけでは説明できない要因がからんでいると思われる。

表10　近所付き合いの頻度

	ほとんど毎日	週に４～５回	週に２～３回	週に１回	ほとんどない	合計
奄美市	49.2%(92)	12.8%(24)	14.4%(27)	9.6%(18)	13.9%(13)	187
瀬戸内町	72.6%(122)	10.1%(17)	7.7%(13)	4.2%(7)	5.4%(19)	168
石垣市	25.7%(47)	13.7%(25)	23.5%(43)	19.7%(36)	17.5%(32)	183
竹富町	49.4%(78)	12.7%(20)	13.3%(21)	8.2%(13)	16.5%(26)	158
合計	48.7%(339)	12.4%(86)	14.9%(104)	10.6%(74)	13.4%(93)	696

５．社会関連性指標

社会参加を含めたふだんの生活における社会とのかかわり状況を組織的に測定する方法に安梅(1995、2000)の社会関連性指標がある。安梅(2013)によると、社会関連性指標は「地域社会の中での人間関係の有無、環境とのかかわりの頻度などにより測定される、人間と環境とのかかわりの質的、量的側面を測定する指標」である。これは、①生活の主体性領域(「生活の工夫」「積極性」「健康への配慮」「規則的な生活」の４項目)、②社会への関心領域(「本・雑誌の購読」「便利な道具の利用」「新聞の購読」「社会貢献への意識」「趣味生活の工夫」の５項目)、③他者とのかかわり領域(「家族との会話」「家族以外の者との会話」「訪問の機会」の３項目)、④生活の安心感領域(「相談者」「緊急時の援助」の２項目)、⑤身近な社会参加領域(「役割遂行」「活動参加」「テレビの視聴」「近所付き合い」の４項目)の５つの生活領域18項目に関して普段の生活がどのようになっているか４件法で答えてもらうものである。社会関連性指標では、たとえば、「困った時に相談にのってくれる方がいますか」という設問に「１．いつもいる」「２．ときどき」「３．たまに」「４．特にいない」の４件法で答えてもらうが、安梅の採点法では、選択肢１から３までを得点１、選択肢４を得点０として得点化する。本研究では、安梅の採点法にならって得点を求め、これらの得点を領域別に合計して領域別得点とした。

表11に、社会関連性５領域ごとの合成得点とそれらを合計した社会関連性全体の得点の平均値と標準偏差、および「対象地」と「性」の２要因分散分析の結果を示す。

社会関連性全体について、分散分析の結果、対象地間に有意差が見られた(p<.01)。奄美市(M=15.94)の方が瀬戸内町(M=14.90)と竹富町(M=14.60)よりも社会的かかわりが高かった。な

お、性差は見られなかった。

①生活の主体性領域について、対象地および性による違いはなかった。②社会への関心領域については、対象地間に有意差が見られた(p<.01)。奄美市(M=3.94)の方が瀬戸内町(M=3.36)と竹富町(M=3.40)よりもより積極的な生活を送っていた。情報入手等において島嶼都市部が島嶼集落部より有利であることが関係していると思われる。なお、これについて性差は見られなかった。③他者とのかかわり領域について、性差が有意であり、女性(M=2.91)の方が男性(M=2.76)よりも対人関係の維持に努めていた(p<.01)。また、対象地について瀬戸内町の方が竹富町よりも得点が高い傾向にあった(p<.10)。同じような離島集落部ではあるが、瀬戸内町の方が竹富町よりも対人関係が密であると考えることができる。④生活の安心感領域について、対象地(p<.05)と性(p<.01)に有意差が見られた。対象地では、石垣市(M=1.93)の方が竹富町(M=1.78)よりも得点が高く、奄美市と瀬戸内町はその中間にあった。同じ八重山諸島ではあるが石垣市の方が竹富町よりもより深い人間関係が築かれていることを示している。性差については、女性(M=1.91)の方が男性(M=1.80)よりもより深い人間関係を築いていた。⑤身近な社会参加については、女性(M=3.17)の方が男性(M=2.99)よりも社会参加をしているという性差が見られた(p<.05)。

普段の生活における社会的かかわり状況は島嶼都市部の方が高い傾向にあった。全体では性差はなかったが、個別の領域、特に人間関係の密度や深さそれと社会参加において女性の方が積極的であった。また、社会関連性の個別領域において、島嶼都市部と島嶼集落部の要因だけでは説明できないそれぞれの対象地の持つ特性要因が社会関連性と関連していることが示唆された。

表11　社会関連性５領域および全体得点の平均値(標準偏差)と対象地×性の分散分析の結果

		生活の主体性(4項目)	社会への関心(5項目)	他者との関わり(3項目)	生活の安心感(2項目)	身近な社会参加(4項目)	社会関連性全体(18項目)
平均値(標準偏差)	奄美市	3.86 (.499)	3.94 (1.292)	2.86 (.437)	1.87 (.441)	3.22 (.873)	15.94 (2.439)
	瀬戸内町	3.71 (.739)	3.36 (1.669)	2.92 (.301)	1.85 (.478)	3.11 (.813)	14.90 (3.066)
	石垣市	3.82 (.520)	3.63 (1.506)	2.83 (.522)	1.93 (.318)	3.00 (.871)	15.33 (2.683)
	竹富町	3.76 (.725)	3.40 (1.469)	2.77 (.603)	1.78 (.489)	3.02 (.800)	14.60 (2.930)
	男性	3.76 (.685)	3.66 (1.476)	2.76 (.592)	1.80 (.530)	2.99 (.890)	15.11 (2.848)
	女性	3.82 (.575)	3.57 (1.510)	2.91 (.364)	1.91 (.348)	3.17 (.803)	15.33 (2.775)
分散分析のF値	対象地	1.905	4.704** 奄美市>瀬戸内町、竹富町	2.233+ (瀬戸内町>竹富町)	3.164* 石垣市>竹富町	.996	4.242** 奄美市>瀬戸内町、竹富町
	性	1.463	1.149	14.081** 女性>男性	9.932** 女性>男性	4.482* 女性>男性	.067
	交互作用	.758	.261	.517	1.405	1.157	.632

注1)** :p<0.01,　* :p<0.05,　+ :p<0.10

注

1）本研究にあたっては、調査へのご回答をいただいた奄美市・瀬戸内町・石垣市・竹富町にお住まいの高齢者のみなさまをはじめ、調査実施にご協力をいただいた21名の民生委員の方々、および各種関連団体（奄美市民生委員児童委員協議会、瀬戸内町民生委員児童委員協議会、石垣市民生委員児童委員協議会、竹富町民生委員児童委員協議会、瀬戸内町社会福祉協議会、竹富町社会福祉協議会、瀬戸内町役場、竹富町役場）からのご協力をいただいた。書面を借りて感謝申しあげる。

なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）『琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究』（研究代表者：田畑洋一、課題番号　23330190）の成果の一部である。

2）沖縄大学 人文学部 福祉文化学科 准教授

文献

安梅勅江(2000)『エイジングのケア科学－ケア実践に生かす社会関連性指標－』川島書店.

安梅勅江(2013)「社会関連性指標Index of Social Interactionの活用」
(http://square.umin.ac.jp/anme/research/anme/ISI.html, 2013.5.5)

安梅勅江・髙山忠雄(1995)「社会関連性評価に関する保健福祉学的研究－地域在住高齢者の社会関連性評価の開発及びその妥当性－」『社会福祉学』36(2), 59-73.

小窪輝吉・田畑洋一(2006)『離島の離島における高齢社の自立生活と地域の役割に関する研究』(平成15年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)

小窪輝吉・田畑洋一(2001)「加計呂麻島の高齢者のインフォーマル・ネットワークと社会参加」『地域文化と福祉サービス　鹿児島・沖縄からの提案』日本経済評論社.147-170.

田畑洋一(1996)「地域の振興と高齢者福祉」『分権時代の経済と福祉』日本経済評論社, 229-250.

九学連合奄美調査委員会(1982)『奄美－自然・文化・社会』弘文堂.

髙山忠雄(2003)「ケアマネジメントにおける福祉用具・住環境支援の一体的有効活用とその評価法の開発に関する研究」(平成14年度総括研究報告書 厚生科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)総括・分担研究報告書)

内閣府(2012)「平成24年度版　高齢社会白書」
(http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/24pdf_index.html)

原田勝弘・水谷史男他(1999)「エイジング問題の実証的研究－加計呂麻島調査をめぐって」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』29号, 107-118.

山下匡将・村山くみ他(2007)「島嶼地域高齢者の楽観性に関する研究」『名古屋学院大学論集　社会科学編』第44巻第2号, 239-250.

Life Styles and Social Welfare Needs of the Elderly Who Live on the Amami Islands and the Yaeyama Islands

— Health states, family situations and social involvements - (1)

Fusako IWASAKI, Teruyoshi KOKUBO, Yoichi TABATA,
Yasuhira TANAKA, Tadao TAKAYAMA, Chikako TAMAKI

The purpose of the study was to investigate the life styles and the social welfare needs of the elderly who live on the Amami islands and the Yaeyama islands through a questionnaire survey. The regions surveyed were the urban area of the Amami Ohshima (Amami City) and the rural area of the Kakeroma islands (Setouchi Town) in Kagoshima prefecture, and the urban area of Ishigaki island (Ishigaki City) and the rural area of Iriomote island and Hatoma island (Taketomi Town) in Okinawa Prefecture. The people who dwell on these remote islands are usually under unfavorable conditions geographically and economically and the communities there are under dysfunctional state by depopulation and aging. On the other hand, these islands keep the spirit of mutual helping and the traditional cultures.

From the data of 714 respondents (284 males and 430 females) , we analyzed the health states, the family situations and the social involvements. Almost 90 percent of the elderly reported that they were healthy. There was no difference in the self-rated health condition among these islands. The number of the single elderly people was higher in Setouchi Town and the number of the multigenerational households was higher in Ishigaki City. Although the percentage of the elderly who participate in community events was higher in the rural area of Setouchi Town and Taketomi Town than in the urban area of Amami City and Ishigaki City, the index of social interaction was lower in the rural area than in the urban area.

Key Words: Remote islands, Life of the elderly, Index of social interaction